

古ジャワ語シヴァ教文献 「原理の知識」和訳（2）¹

安 藤 充

19.

悪魔ヤクシャが、神、神仙、七仙、五仙、三神²と交われれば、そのとき、その（サットワな³）統覚には格別な光輝が生じる。それは、アートマンが解脱の境地を得る因となる。悪魔デンゲン⁴が、ダイティヤ、ウイドウヤーダラ、デーワターと交われれば、そのとき、その（サットワかつラジャな）統覚には格別な光輝が生じる。それは、アートマンが天界を得る因となる。悪魔カラが⁵ヤクシャ、ガンダルワと交われれば、そのとき、その（サットワ、ラジャ、タマの）統覚には格別な光輝が生じる。それは、アートマンが人間となる因となる。悪鬼ピシャーチャがラクシャサと交われれば、そのとき、その（ラジャかつタマな）統覚には格別な光輝が生じる。それは、アートマンが地獄に墮ちる因となる。悪鬼ピシャーチャがピシャーチャとのみいれば、そのとき、その（タマな）統覚には格別な光輝が生じる。それは、アートマンが畜生になる因となる。

このように、アートマンが様々に異なる因となることは、あらためて思念されなければならない⁶。

三神は粗大である。（ここで三神とは）ブラフマー神、ウィシュヌ神、主宰神（シワ神）である。彼らは、最上のサットワとなる。

もし最上のサットワにあるものが、懈怠ゆえにヨーガが不足することがあれば、（その結果）五仙となる。五仙もヨーガが足りなければ、七仙になる。七仙のヨーガが足りなければ神仙となる。神仙のヨーガが足りなければ、デーワターとなる。デーワターのヨーガが足りなければ、ウイドウヤーダラになる。ウイドウヤーダラのヨーガが足りなければ、ガンダルワになる。ガンダルワのヨーガが足りなければ、ダーナワになる。ダーナワのヨーガが足りなければ、ダイティヤになる。ダイティヤのヨーガが足りなければ、ラクシャサになる。ラクシャサのヨーガが足りなければ、ヤクシャになる。ヤクシャのヨーガが足りなければ、デンゲンになる。デンゲンのヨーガが足りなければ、カラになる。カラのヨーガが足りなければ、ピシャーチャになる。ピシャーチャのヨーガが足

りなければ、人間になる。

この人間には、知力が具わっていない。なぜならば善も悪も積み重ねられるからである。もし神格と知力が等しければ、その人は成就した者と呼ばれ、神々の仲間の一人となる。人間にヨーガが不足していれば、畜生になる。

畜生には五種⁷ある。家畜は村落にいる。獣は森にいる。魚は水に棲む。鳥はあらゆる所に飛ぶ。蟻とは、胸（腹這い）で進む生き物の名である。他の人々は這いずり虫という名で呼ぶ⁸。以上は、動物と称される生物である。爬虫類は腹で進む。

植物とは、その場所でじっとしている生物である。（しかし爬虫類は）腹で進む⁹。

このように、アートマンは、人間が放逸でヨーガを怠ると、動物に変じるのである。

20.

ああ嘆かわしいことに¹⁰、アートマンというのは悪意と哀れみに際限がない。その本性として、すぐに滅び消えていき、再びあらわれることはない。あたかもアートマンには意識がないかのようなのである。ちょうど、大麦¹¹の一粒が包丁で千に砕かれ海に沈められると、その大麦を見つけることは現実には到底無理であるのと同じである。

このように、アートマンが動物に変じるならば、家畜になったほうがました。なぜなら、善行をなす手段となり得るからである。

蟻になると、テテク、蛭、ウディト、蛇、なめくじ、いもりの類い¹²のように、どれも人間に嫌われている。ましてや、それが（よい方に生まれ）変わることはありえない¹³。

さらに、動物の方は、恐れられもするし、嫌われもする。それはいったい何を意味するか。それは、悪行のことである。悪行には、小・中・大¹⁴があり、それぞれに特徴がある。悪行のうち小とはいかなるものか。怒りで我を忘れ¹⁵、粗暴で落ち着きをなくす。そうこうして人は悪行に手を染める。その結果、地獄に墮ちる（ということである）。そこを脱出して人間界に戻るにはヤマの軍勢の手を借りなければならない。（その場合でも）善き人と同じというわけではない。それは変成した者と言われる。傷を負っているのである。あらゆる類いの傷は、かつての悪行の結果である。

21.

さて、人間が中くらいの悪行を犯し、憐れむべき結果を生じるとするのは、次の通りである。（まず）、衣食に事欠くと、これが悪行の原因となる。食にありつこうとして、盗人になり、善人の財を掠め取る。それで、取っ組み合いをして命を落とし、地獄に直行する。地獄から逃れた後は、ヤマ神の軍勢によって家畜としての生を与えられる。この家畜というのは、食されるために存在する。食用になるということは、犠牲祭を執り行う材料となるということである。

このように、前世の行為が潜在力(薫習)¹⁶として残されるのである。以上が卑しい悪行の果実である。

22.

悪行をなす者のうちの最たる者とは次の通りである。驕慢により、貪欲により、迷妄により、欺瞞と妬みにより、清浄さを失い、知識が濁る。それで人は悪行を犯す。罪なき人を襲い、無垢な女をさらって売り飛ばす。それにより、他の人々の心に苦痛を与える。こうしたことは、人喰いに等しいと言われる。

このような人の一生はこうである。すなわち、ふつうの人々に常に嫌われ、疎まれ、恐れられる。どこへ行ってもどこにいても文句を言われ、落ち着くところがない。彼らは命終するや、地獄に赴くのは必定である。

地獄から脱した後は畜生となるが、それはヤマ神の軍勢の力による。しかしなんと、それらは皆、人間に嫌われ疎まれ、恐れられる。このような生となるのである。以上、悪行を犯した者のうちの最たる者の果が説かれた。さらにあり得ないような悪者にはその上のも(酷い果)がある。(彼らには)アートマンが生まれる元がない。(アートマンがそこに)ある意味など知り得ようか。もし何か機会があれば、賢者に悪人の考えを伺うこともできようか。

さて、どのような理由があって五種の畜生が存在するのか。人間が悪行を犯したことが形としてあらわれたのである。それゆえ、ある人々にとって人間に対する行為が、(他の人々には)畜生に対する行為となる。他の人々はこう言う。「ほら、このように、世界も五種の畜生も、同時に現れる。」

さて次に、天界と地獄について述べよう。もちろん善悪双方のすべての生類についても。それは、世界の運行の前提条件となるものである。天界は善なる行為の結果、地獄は悪行の結果として生じる。

地獄から脱した後は、畜生となる。それは悪行の果である。要するに、生きとし生けるものの基盤¹⁷となるのは善悪(の行為)である。したがって私たちには三界¹⁸があらわれる。苦や楽や、痛みや飢え、暑さや寒さ、老いや死を経験する。(この世の)生はこのように成り立っている。好ましきと好ましからざるとの両方である。

それゆえ、私たちには何ら疑念はない。なぜなら私たちの世界の基盤は神の定めにある。(神により)私たちは死に、また生まれ来るのである。これが私たちの生命である。

23.

さて、原理の知識こそ、(私たちの)めざすものである。なぜならば、究極のことを指し示してくれるからである。それによって、この世に(再び)生まれ来る原因を減らすことになる。その原理の知識の精髓を知り、味わい¹⁹、耳を傾けることで、この世で

その知識をしかと会得できるだろう²⁰。それは聖教による。(それにより)奥義²¹の精髓が(私たちに)生み出される。正しい知識とは灯明のごとくである。誓戒、苦行、ヨーガ、瞑想²²の基となる。それはアートマンの流転に対する薬である。

24.

さて、アートマンはどうして流転を経験するのか。(それは)私たちが原理の知識を味わうことに惑い悩んでいるからだ。ああ嘆かわしい。なぜならば、アートマンの(真の)静寂は第四の境地²³にあると言われる。主宰神の場合は言うまでもない。物質性のない状態にあって²⁴、そこここに現前すると言われる。神の行動力²⁵は自我意識に入り込む。自我意識は風に入り込む²⁶。風は脈管に入り込む。脈管は微細な身体²⁷である。その身体は五趣の流転²⁸の苦を経験する。(それに従って)必ずや、「神もまた流転を経験する。であるからして、家畜にも変じる」と、このように他の人々は言うかもしれない。しかし断じてそうではない²⁹。

それは例えるとうである。神は鍛冶屋に等しい。鉄は鍛冶屋が作る。鉄は道具³⁰に作られ、形状は多様になる。鉄床(かなとこ)、金槌、やっこ、やすり。これらはみな同じ鉄である。同様に、粗鉄が鍛冶屋によって剣に铸造される。剣もまた形状は多様である。王の武器に用いられるものもある。村人の武器になるものもある。賢者の武器になるものもある。(これらは)すべて剣という名称をもつものであるが、それは、鋭いもの(刃)のある鉄製のものが剣と呼ばれるのである。しかし、鍛冶屋は様々に異なったもの作り出す。王の元にある剣は短剣(クリス)のような姿(だが他方)、槍とやり合うものは戦闘用の武器となり、命を奪うことがその機能である。(一方)村人の手になる剣は、包丁あるいは金槌³¹のごとくであり、生活の糧を生み出すことがその機能である。賢者の元にある剣は、はさみ³²のように切るための道具である。

実に(このように)剣もまた善悪に関わる。しかしながらそれは道具にすぎない。善悪と戦う助けにはならない。ましてや鍛冶屋は言うまでもない。鍛冶屋はどこにでもある。鍛冶屋は思うがままに粗鋼を鍛練する。鍛冶屋は粗鋼のことを知り尽くしている。(したがって)彼が意思こそが道具となる。意思が行為の道具となるのである。鍛冶屋が道具を作用させる、その行為が道具なのである。鍛冶屋が休めば、(鎚)音が静まる。道具も音を立てない。鍛冶屋は寝室に休む。

25.

耳を傾け、よく聞くがよい。主宰神は次のようである。神は遍満するものである。その意識こそがまさに(遍満する)。すべての命あるものを生み出す。神の行動力は物事を成就するために用いられるからである。

アートマンは第四の境地、及び、覚醒の境地において出現する。熟睡の境地において

も神はアートマンを出現させる。アートマンは五悪趣の流転の苦を経験する。(すなわち) 楽と苦、痛みと飢餓、寒暑、老死。要するに、神々によってアートマンは流転の苦を受けるのである。

さて、次のように、よく覚えておくがよい。主宰神は実体ある事物を見ようとする。それゆえに、アートマンを個別の一つとして求めることになる。なぜなら、様相としては、アートマンは、神が求めるときには、二分されているようになるからである。神は世界の根本原質の原理³³に意識を生じさせるように命じる。そしてそのときアートマンは二分される。活動的なアートマンと、非活動的なアートマン³⁴とである。

活動的なアートマンというのは、神が根本原質の原理に意識を生じさせるようにするときである。意識を生じさせるとは、記憶を作動させることである。思念する、想起するといった語が、意識を生起するということである。

26.

非活動的なアートマンと呼ばれるものについて、主宰神が活動を休止し沈黙するとき、神は意識を生起させることを停止する。(そのとき) アートマンも静止し、意識の生起を停止する。これはちょうど前に示した例え、(つまり) 道具と鍛冶屋のごとくである。道具は(自らは) 何もしない。アートマンも同様な働きをもつ。主宰神により意識の生起を命じられなければ、アートマンは意識を生起させず黙している。独存の状態³⁵にあり、確固不動にして揺らぐことがない。こうしたアートマンは最高の³⁶アートマンと呼ばれる。法なる神³⁷と言う人々もある。他方、主宰神が活動し、意識を生起させるとき、神は認識根拠³⁸とも呼ばれるが、このとき、アートマンも認識根拠と呼ばれる。それは最高なるアートマンであり、独存し、不動にして、第四の境地にある。

アートマンが覚醒の境地にあるとき、それは独存の状態にあるので、第四の境地にあるアートマンと同種である。ただし、両者の差異は、一方が粗大、他方が微細である所にある。(まず) 覚醒の境地にあるアートマンは、意識³⁹を本性とする。意識とは、粗大なるアートマンで、第四の境地にある。意識のありか、すなわち心⁴⁰と呼ばれるものは、自らの特質に縛られている⁴¹。心というのは、記憶の作用であり、善悪の判断には関わらない。記憶と心は、本性として一つである。記憶は静止状態にあり、寂靜にして不動である。覚醒の境地にあるアートマンは記憶の作用の一つであり、かつまた作用しない。その違いはといえば、アートマンとは呼称に過ぎない。アートマンは(神の) 創造活動の対象であり、苦楽の流転を経験する。こうしたアートマンは、自我意識とも呼ばれる。主宰神によって形づくられるや、ますます粗大さが増す。アートマンは覚醒の境地にあって道具となる⁴²。第四の境地においても同様である。それは神の仕業である。このように思慮すべきである。

アートマンは洗練された自我意識⁴³と言われる。それは十の感覚器官とともに神がこ

しらえる。原初的な自我意識⁴⁴と呼ばれるアートマンは、神により五つの微細と五大元素⁴⁵を作るように命じられる。

さて、意とは心である⁴⁶。心には像が投影される。その結果、惑いなきアートマン⁴⁷となる。惑いなきアートマンとは、随伴するアートマン⁴⁸である。随伴するアートマンと呼ばれるものは、次のようである。すなわち、アートマン、最高アートマン、非アートマン、中間アートマン、微細アートマンである。これらは五種のアートマンと呼ばれる⁴⁹。

心は一つである。それは、粗大なるアートマンの残りと呼ばれるものである。それは行く末に善悪と向き合うことになり、真に終わりが無い⁵⁰。

27.

「根本原質は車の如し。純粹精神は雄牛の如し。世界は回転する車輪の如し。主宰神は御者として。」⁵¹

28.

根本原質の原理は車に例えられる。アートマンは雄牛に例えられる⁵²。主宰神、つまり司る神は御者に例えられる。アートマンを調御して車を引く。

「世界は回転する車輪の如し」（と引かれたが、それを解説すれば）、世界は車の車輪に例えられる。善悪の業を原因とし、神、人間、畜生界において回転しつづける。このようであるから、アートマンは粗大となる。それは剣であり、鍛冶屋の行為になぞらえられる。一方、活動的なアートマンが第四の境地にあるとき、それは鍛冶屋のやっところに例えられる。一方、非活動的なアートマンは、ちょうど鍛冶屋の鉄床に似合っている。アートマンが覚醒の境地にあるとき、及びアートマンが第四の境地にあるとき、善悪と向き合うことには関わらない。ましてや最高神はその関わりはもたない。神は他をすべて満たし、どこにでもおられる。

まず意が求めるのはこの実世界⁵³であり、すべての生命の誕生を引き起こす。さて、「どのようにアートマンが流転を経験すると言われるのか」このように他の人々が尋ねる。（それに答えて言えば）流転を経験するアートマンと言われるのは、洗練された自我意識と呼ばれるものである。それはサットワな統覚で、痛みを感知する。激情的な自我意識とはラジャな統覚である。それは痛みを与える。原初の自我意識と言われるアートマンはタマな統覚である。それは痛みを受ける対象となる⁵⁴。

29.

（痛みなどを）知覚するアートマンと、知覚しないアートマンの違いは、次の通りである。どうして（神は）「法なる神」と呼ばれるのか。なぜなら、すべての生あるもの

の命となっているからである。確かに神はすべての人間の命の元となっておられる。その特徴は「編み込まれ、結ばれている⁵⁵」ことである。編み込まれているとは、火切り⁵⁶の中にある火のごとくである。竹も木も、その中に火があるのに(ふだんは)認識されない。眼にも見えない。しかし火の存在は自明である。存在するのに眼に見えない。それはどういう意味か。火切りでこすって竹や木の中に火をおこすのだが、明らかに、竹や木が火を発生させるのではない。火切りが火を発生させる能力をもつ。というのは、それらが自ら(何も無いところに)火に包まれるようなことは困難である。

30.

耳と聴覚は切り離さなければならない⁵⁷。神にも同じことが言える。神は顕現にして非顕現である。その存在はすべての生類に及ぶ。それが神の顕現にして非顕現なあり方である。あらゆる人間の中に存在するが、そのすべての生命と神が同等であると言ってはならない。意識も知識も伴わない存在である一方、神は意識と知識に満ちあふれたお方である。最初にその名が語られる者である。奥義⁵⁸の知識の内容に精通している。さらに、苦行、誓戒、ヨーガ、瞑想⁵⁹を修めている。したがって、どうして、知識を増大させ最上のヨーガを獲得することが難しかろうか。望めばいつでも成就される。すでにヨーガと瞑想には通じている。苦行、誓戒、ヨーガ、瞑想を修めているので、思い通りに事を叶えられる⁶⁰。目的を遂行できる。すべての秘儀を行じられる。(そこに)困難はない。なぜなら、最上のアートマンが等しく満ち満ちているからである。(とはいえ人間の身に)神がしかと定着されるようにするのは困難である。

「編み込まれている」とは、すべてはそなたの境界内にあるということである。寶石の中の光輝のごとく、一つにまとまっている⁶¹。神も同様である。一つ所にいらっしゃる。神によって確立されているものは内的な存在であり、誓戒、苦行、ヨーガ、瞑想は無意味である。しかしそうであるにせよ、それらは実修しなければならない。なぜならそれらは単なる名称ではない。(最上のものとして) そのように希求されているものである。というのも、それに最上のアートマンが満足するのは難しいし、また神がそれらを安定させるのも困難である。このように聖典は説く。

確かに他の人々はこう語るが、そんなことはあり得ない。誓戒、苦行、ヨーガ、瞑想を実修せよ。なぜならば瞑想は主の本願⁶²、(すなわち)最上のアートマンの現前、さらには神の光臨であるからである。もし誰かがたゆむことなくその瞑想を修行すれば、(それこそ)主の本願である。長期間(の修行)というところではない。命に終わりがあっても、来世にても瞑想を修するのである。瞑想を行なう者は記憶を保持する。そして神はそのように覚えていらっしゃる。その者(瞑想の行者)には神がしかと降り来る。要するに、神は瞑想の対象であり、それゆえ、人間のもとに神が来るのである。もし神を念じなければ、神は人間のもとには来られないのである。その場合、(人は)五種の

畜生⁶³になる。というのも法なる神が身体（のかたち）をとるのをやめられるからである。それが覆ることなどあり得ようか。それゆえ意識を有しない。これが最上の存在である⁶⁴。すべての目的には思いが伴う。したがって（そこに）法なる神が宿ることになる。

そのようにならないことはあり得ない。これこそ境界となり、認識の根拠となる。神がそれに対して無関心であれば、ただそこには神がいらっしやらないだけである。それが最高のアートマンの帰趨である。そのときアートマンはそこにはない。それは惑いなきアートマンである⁶⁵。粗大なアートマンの名残である。それは心⁶⁶と呼ばれる。それゆえ、それは風であり声である。心はまさにその場所にある。風に命を与える手段である。心とは省察する手段となる。声は音を出す手段となる。ゆえに、畜生の声には実体がない。最高なるアートマンが遍満していないからである。

さて、風、声、心は、大小の畜生から、植物、動物、草木、つる草、灌木の類いにまで届く。風、声、心がなくなることはない。生あるものは成長していく。しかし最高のアートマンはそこには存在しない。そのような生起においては、しかるべき特徴が消滅するのである。

31.

風、声、心は生々流転するものであり、人間の生の中にある。また、下等、中等、上等（の別）がある。風、声、心には欠如することがない。

一方、最高のアートマンとは、内的なものである。最高のアートマンは遍満する存在である。主宰神が遍満しておられることはいうまでもない。人々は神と崇めている。すべての人間の生は、仲間のそれと等しいわけではない。意識があり、意識の喪失があり、知識があり、無知がある。これはどういう意味なのか。最高のアートマンが遍満している者は、知識があり意識がある。なぜならば、意識があるというのは、最高なるものを体現しているからである。

さて、人間には、知識があり、意識がある人がいるが、そこに上中下がある。それはこういうことである。いったい何故にこういうこと（区別）があるのか。上中下というのはアートマンの様相なのか。アートマンが人間の生を存在させるものである。それゆえ、上中下がある。たとえば、意識も知識もある人がいる一方で、無知の人もいれば、意識の欠落した人がいる。意識がない者は下の下である。そのアートマンもそのように呼ばれる。このように（アートマンは）上中下の生と結びつき、知識や意識を得させる。というのは、アートマンの上中下というのは、覚醒の境地にあるとき、また第四の境地にあるときの様相である。上等のアートマンが人間に宿るとき、その人間は上位にあり、（アートマンが）知識と意識とを獲得させる。中等のアートマンが人間に宿る場合、それにより人間は中位にあって、（アートマンが）知識と意識とを獲得させる。下等のアートマンが人間に宿る場合、それにより人間は下位にあって、（アートマンが）知識と意

識とを獲得させる。下の下のアートマンが人間に宿る場合、知識も意識もない。

しかしながら、意識だけが人間にある場合、それは、最高、最上のアートマンのおかけである。上等のアートマンは得難く、最高のアートマンとも呼ぶべきである。

だがそんなことはあり得ない。それは違う。最高のアートマンは人々に等しく宿る。(そのとき) 最高の性質が欠如するようなことはないと言われる。しかし、すべての生類には優劣があり、連れ立つものが他にある。それらが清浄あるいは不浄な行為を引き起こすそれゆえ、生命に上中下がある、ということである⁶⁷。

32.

異論のあなた方はこう言うだろう。自分たちの言うことは正しいと。楽と苦とは、浄と不浄と呼ばれる。知識ある者あれば無知な者あり、意識ある者あれば意識の欠落する者あり。これはまず第一に(過去の) 所業を物語っている。どうして知識ある者が意識をもつか。それはまさに慈愛である。力や富を伴うのではない。ましてや、変容の結果というのではない。そのように(知識と意識の有無に関わる) 生起がある。

さて、知識と意識をもつ者が、まさにそこ(力や変容)から生じるとすれば、黄金や宝石という物質となる。それは朽ちることのない生命をもち、永遠の力をもつ。意識がないとか、知識が伴わないとか、その理由は、それを生ぜしめる者が存在するからである(と言うだろう。しかし)それは間違っている。浄不浄の行為を生ぜしめるからである。要するに、特別なアートマンを具える者は、不可侵の存在である。特別なアートマンを宿せば、知識あり、意識をもち、あらゆる人々を凌駕する。無知な者、意識を喪失した者を容赦しない。意識あり、知識ある者だけがすべてである。そこに生の上中下があるとするのである。意識の喪失も、無知もない。意識ある者、知識ある者、それだけが適う者である。なぜならば、最高のアートマンは等しく遍満し等しく確立されるものであるから。

異論のあなた方は、どうしてそうではないということがあり得ようかとおっしゃるだろう。しかるべく推理して存在範囲を見極めている(からと)。最高のアートマンを宿す方はとても得難い。最高のアートマン(を宿す)とは、知識があり、輝かしい意識を具現していることであり、それが推理の根拠である。意識を喪失し、知識のない生命体には、意識も知識も付与されない。最高のアートマンの帰趨としてはそれらは対象外である。

どうしてアートマンはそのようであるのか。それは活動的なアートマンである。それが覚醒の境地にあるときである。...⁶⁸具象でないものを具象的に捉え⁶⁹、眼に見えないものを見る。そのようなとき、それは存在するのである。それゆえ、実際にあるものも、ないものも、具体像で認識する。だから畜生よりも優れているといえるのである。しかし、最高なるものを認識せず、聖典⁷⁰にも通じなければ、混迷の生と言われる。意識が

獲得されれば、善なることが起こり得る。なぜなら、聖典の教義は灯明に照らされるものではないからである。

明らかに知識をもって生をうけた人ならば、聖典をよく学べば賢者となるが、（そうでなければ）知識をもち意識を有していても下等（な生）となる。それは最高のアートマンが宿らないからである。（その場合は）しかるべきように変わっていかない。

活動的なアートマンは覚醒の境地にある。（神は）そのようなところにいらっしゃる。

33.

明らかに知識をもって生をうけた人で、聖典をよく学び、すべての特質を具えていると衆目の一致する⁷¹人は、正しい知識をもつ⁷²。知識ある人の最上である。まさにそこに最高のアートマンがいらっしゃる。そこにそのようにいらっしゃるものが、最高のアートマンと呼ばれる。法なる神である。法なる神というのは、非活動的なアートマンで、覚醒の境地にある。それは叡智と呼ばれ⁷³、意識が現前する源であり、光輝⁷⁴である。そのようにそこに（最高のアートマンが）いらっしゃる。

一方、それを超えていくとみられる人がいる。その知識と意識は最上を超えと言われる。あらゆるものに目に見えるかたちで遍満する。それは推論の対象を現前させ、八自在力⁷⁵をもものにすることができる。また、究極のヨーガを修得する。（つまり）最高のヨーガ行者⁷⁶の地位を得た者の中でも最上である。そして、他の者の考えに左右されることは決してない⁷⁷。そこには神にもとづく認識根拠がある。神にもとづく認識根拠というが、この神とは常在のシヴァの原理である。もちろん法なる神のことである。（神は）そのようなところにいらっしゃる。

注

- 1 本編は『人間文化』第24号所収の同テキスト1-18に対する訳注研究（安藤2009）に続くものである。テキスト解題については同論文を参照。
- 2 *tripuruṣa: Brahmā, Viṣṇu, Śiva* を指す。
- 3 ヒンディー語注にならって補足。以下、統覚の説明については同様にヒンディー語注を参照。
- 4 本書第4で、シワの行動力により生み出されるあらゆる神鬼の中に列挙されている。また第18ではタマの統覚の母胎としてのデンゲンが言及される。安藤2009, pp.163;165参照。
- 5 *kunañ irikañ bhūtakāla: irikañ* に換えて、異読の *ikañ* を採用。
- 6 この文中にある“*wyaṅga*”の意味が不明。異読のように、この語を抜いて意味をとるべきか。
- 7 *Wṛhaspatitattwa* 24 に同様な言及がある。安藤2005, p.329参照。
- 8 文頭の *tani* を異読の *rumambat* に換えて解釈しておく。
- 9 直近の表現との繰り返しになるので、写本伝承上の重複記述のようにみえる。
- 10 *sas harah*: これを *sis harah* (OJED によれば *complaint* の“ah!”) と読む。
- 11 *jawa*: Gonda 1973, p.225 参照。
- 12 *tētēk lintāḥ wēdit warayañ hirispoḥ: tētēk* を OJED は“some repulsive creature”とし、また *wēdit*

- を“a kind of small snake”とするが不詳。warayaṅ は warya-warya (“a kind of crawling animal”)、hirispoḥ は hiris-hirispoḥ (“a kind of small worm like a leech”) にそれぞれ相応すると読む。同様な列挙については、Wṛhaspatitattwa 24.7、Ślokāntara 33.6-33.7、Tantri Kāmandaka 160.11 を参照。
- 13 pisanīnu yan kolahana: 意味がはっきりしない。cf. kolah-ulahan “(pvs) to move, set in motion, alter, shake” (OJED).
- 14 kaṇiṣṭhamadhyamottama: 最低から最高の3段階というよりは、悪の度合いが最小から最大という意味合いと解釈しておく。
- 15 kaluputan: OJED は一般的な “to lose something” に加え、“to be in the wrong” および “to lose hold of the proper course” という意味の可能性も示唆しているが、ここでは文脈で意味を取っておく。
- 16 wāsanā: Wṛhaspatitattwa 3 で、この世の行為が、香が瓶に付着して残るように、アートマンに付着して来世の果となることを論じている。安藤2005, p.321 参照。
- 17 saji: ヒンディー語注の “ādhāra” との解釈による。Cf. “necessities, requisites” (OJED).
- 18 triloka: 言うまでもなく天界、地界、地獄界を指すが、この語は Wṛhaspatitattwa には用いられていない。また他の古ジャワ語テキストでは、Rāmāyaṇa (21.92) など、trilokya という語形が一般的に用いられている。
- 19 rumase: OJED に登録されていない語形。Cf. rumasa “to feel, taste, enjoy”; aṅrase “to taste, feel, enjoy”.
- 20 yapwan enak atamwan: atamwan を異読に従って atēmwan (<katēmwan) とする。
- 21 prayoga sandhi: “secret means: esoteric knowledge of the (right) means”. 他の古ジャワ語シヴァ教テキストにも散見される。Cf. Wṛhaspatitattwa 50.5: śūnyāku n waraha kita, apan yeki sinaṅguh prayoga sandhi nāranya, rinahasya de saṅ yogīswara; Jñānasiddhānta 72.10: prayoga sandhi, rahasya dahat.
- 22 brata tapa yoga samādhi: Wṛhaspatitattwa 25 では śīla, yajña, tapa, dāna, prawrajyā, bhikṣu, yoga の7つを dharma として挙げる。そこでは古ジャワ語解説で yoga=samādhi を行うこととしている。
- 23 tūryapada: Wṛhaspatitattwa 47 及び61 で言及される。安藤2007, p.204 (訳注43) 参照。
- 24 hana riṅ niṣkala: あるいは「眼に見えない」(niṣkala “invisible”) くらいの意味か。
- 25 kriyāśakti: Wṛhaspatitattwa 13 でシワ神の四種の力の一つとして挙げている。
- 26 Wṛhaspatitattwa 35 の古ジャワ語解説中に同様な表現 (śakti が ahaṅkāra に、ahaṅkāra が wāyu に入る) がある。なお、ここでは「風が脈管に」と続くが、Wṛhaspatitattwa では「風が ātman と身体を結びつける」とし、その後で脈管について詳細な説明へと展開している。
- 27 sūkṣma riṅ śarīra: 意味的には sūkṣmaśarīra と等しいと解釈しておく。Wṛhaspatitattwa では「ātman の体をなしている五つの微細 (pañcātanmātra) が微細 (alit) であるがゆえに微細な身体である」(52) としている。
- 28 pañcagatisaṃsāra: Wṛhaspatitattwa には用いられていないが、Tantri Kāmandaka (140.15) に同じ表現がみられる: aṅhiḍēp pañcagatisaṃsāra. ここでは五ヶ所の明記はないが、通ヒンドゥー教・仏教的に、生前の行為によって赴く先、つまり天・人・餓鬼・畜生・地獄と解しておく。
- 29 ヒンディー語注では、「神々はそのような経験はしない」とする。
- 30 prabot: parabwat (“tool”) と読む。後に出てくる prabwat も同じ。Cf. インドネシア語 (ジャワ語由来) の perabot “tools, utensils, equipment” (Stevens 2004 s.v.).

- 31 *pr̥kul*: この語も、異読の *prakul* も OJED には登録がない。ここでは文脈から類推して読みを *pukul* < *pupukul* (“hammer”) と解しておく。
- 32 *pakisi kartrī karayu*: *kartrī* は *kartra* (Skt. *kartari*, *kartarī*) (“scissors”) ととるが、*pakisi* と *karayu* については、鉄製の文具類かと推察されるが、OJED に登録がなく、類似の語形の類推もできず意味が不明。ヒンディー語注も、訳をつけず括弧書きで原語をそのまま残している。
- 33 *pradhānatattwa*: *Wṛhaspatitattwa* 6 によれば、*cetana* と *acetana* の結合により *sarwatattwa* が生じ、その一切の原理に含まれる *tattwa* の最初に *pradhānatattwa* が挙げられる。安藤2005, p.323 参照。
- 34 アートマンを *wyāpāra* と *tan wyāpāra* に分けることは *Wṛhaspatitattwa* では論じられていない。ヒンディー語注では、それぞれ *sakriya* と *niṣkriya* に解している。
- 35 *kaiwalyastithi*: *Wṛhaspatitattwa* には *kaiwalya* ないし *kewalya* という記述は現れないが、*Jñānasiddhānta* (112.4) では主宰神が *kaiwalya* の状態を得ると述べている: *yeka kapaṅgihan in Īśwara kaiwalya*。
- 36 *ātma wiśeṣa*: *wiśeṣa* を “best, paramount, supreme” の意味にとる。
- 37 *bhāṭāra dharma*: “law, virtue” としての *dharma* の神格か。*Wṛhaspatitattwa* では、*dharma* は *triguṇa* (3つの特質) から生起する *buddhi* (知覚) の4種のうちの1つであり (24)、この *dharma* により天界に至る (23, 29) とする。安藤2005, pp.328-329; 同2006, p.201 参照。
- 38 *pramāṇa*。
- 39 *cetana*。
- 40 *citta*。
- 41 *karaktan*: *karakētan* > *rakēt* (“adhered to, attached to”) ととる。
- 42 *makaprabot*: 鍛冶屋の比喩 (第24) の表現で *prabot* を *parabwat* と解する (上記注30参照) のにしろ、*makaparabwat* とする。ヒンディー語注でも、「ここでは *sādhana* の意味」だとしている。
- 43 *ahaṅkāra saṅ waikṛta*: *Wṛhaspatitattwa* 33 では、*buddhi* から三種の *ahaṅkāra* が生じ、そのうちサツワ的なものが *waikṛta*、ラジャ的なものが *taijasa*、タマ的なものが *bhūtādi* としている。安藤2006, p.203 参照。
- 44 直上の注43参照。
- 45 *Wṛhaspatitattwa* 33 では、原初の自我から五つの微細が、五つの微細から五大元素が生じると詳説する。安藤2006, pp.203-204 参照。
- 46 ここでは *manah* を *hiḍep* と同定している。*manah* は、*Wṛhaspatitattwa* では、*buddhi* と *ahaṅkāra* とで「三つの内官 (*tryantahkaraṇa*)」とし (35)、また、*buddhi* や *ahaṅkāra* とともに「個我に付着する」もの (52)、同じく *buddhi* と *ahaṅkāra* とあわせて、「うつろいさまよってはならない」もの (54) として制感のヨーガの解説で取り上げられている。安藤2006, p.206; 同2007, pp.193-194 参照。
- 47 *ātma lawḥ-lawö*: *lawö* を “without care, without worrying” の意味にとっておく。
- 48 *ātma pariwāra*。
- 49 *pañcātma*: *Wṛhaspatitattwa* には見られない概念だが、*Nawaruci* という文献に次の五種のアートマンが列挙されている: *ātma*, *parātma*, *rasātma*, *niratma*, *satyatma* (47.14)。このうち下線をつけた3つが本テキストと一致する。
- 50 *tan pahusan*: 意味が通らないので、異読の *tan mahuwusan* (“not to come to an end, not to cease”) を採用。

- 51 Wṛhaspatitattwa の第34サンスクリット偈と同一 (jagad と jagat の違いのみ)。本テキストではきわめて稀なサンスクリット詩節の引用であり、この古ジャワ語解説が別立てで番号づけられて次に続くのも例外的である。安藤2006, pp.205; 216 (訳注42) 参照。
- 52 先に引用されたサンスクリット詩節で *puruṣa* を雄牛になぞらえているところを、古ジャワ語解説中で *ātman* と雄牛にしている点が注目されるが、実はこれは Wṛhaspatitattwa の当該箇所でも同様な説明 (*puruṣa* を *ātman* とする) となっている。安藤2006, p.205参照。
- 53 テキストでは *rata* となっているが、*rāt* (*rat*) (“the visible, inhabited world”) と解しておく。ヒンディー語注では *icchā* が *sarvatra* である (さらにパラフレーズして、「すべての生きとし生けるものにある」と述べている)。
- 54 *ātman* を *waikṛta*, *tajjasa*, *bhūtādi* に分類し、それぞれを *sattwa*, *raja*, *tama* に対応させる説明は Wṛhaspatitattwa (33) に見られる。上記注43参照。ただし、Wṛhaspatitattwa でも本テキスト先述箇所でも、痛み (*lara*) との関係で言及してはいない。
- 55 *ūtaprotā*: Wṛhaspatitattwa 14 で用いられる表現。この語形および古ジャワ語による解説については、安藤2005, pp.325; 331 (注28) 参照。
- 56 *ēśyēn*: *uswan* (“fire-drill”) と同定して訳しておく。
- 57 Wṛhaspatitattwa 33 に感覚器官とその機能の区別についての議論がある。安藤 2006, p.205 参照。
- 58 *prayoga sandhi*: 上記注21参照。
- 59 *tapa brata yoga samādhi*: 上記注22参照、ただし列挙の順が異なっている。
- 60 このあたりの叙述で *tapa brata yoga samādhi* (あるいは *yoga samādhi*) に繰り返し言及する論旨が明瞭ではない。テキスト伝承上の混乱か、読解の問題か。
- 61 *kadyaṅga niṅ teja niṅ maṅik maṅekadeśa hananya*: Wṛhaspatitattwa 14 の古ジャワ語解説中に類似の表現が用いられている: *kadyaṅga niṅ maṅik maṅekadeśa gatinya*。上記注55参照。
- 62 *īśwarapraṇidhāna*: Wṛhaspatitattwa には *praṇidhāna* に類する表現はない。他のシヴァ教文献にパラレルがあるかどうかは未詳。OJED には *Rāmāyaṇa* ほかにカカウイン作品の用例が挙げられるのみである。
- 63 *pañcatriyak*: 本書第19中の記述参照 (ヨーガの不足が原因、五種の列挙)。
- 64 *kenakanya*: この一節の論旨ははっきりしないが、*kenak* をヒンディー語注の “*sarvaśreṣṭha*” に沿って OJED (*under inak*) が挙げる “the best thing” に解しておく。
- 65 上記注47参照。
- 66 *hiḍḍp*: 以下、*wāyu* と *śabda* と並んで議論されるが、これだけサンスクリット由来語でないことが注目される。
- 67 アートマンの上下中の分類とその解説は、Wṛhaspatitattwa では展開されていない。
- 68 *ikaṅṅiranandita*: この連語の区切り方が不明で何らかの意味を読み出せない。ヒンディー語注も疑問符を付すのみである。異読 (*dita* → *hita*) でも解決しない。
- 69 *amastwani*: Wṛhaspatitattwa でも、*umastwi* (33) や *winastwan* (49, 50) という語形で、同義 (形なきものを具象、実体として認識) を表現している。安藤2006, pp.205; 211–213; 216 (注41) 参照。
- 70 *sāstrāgama*: OJED の “written holy tradition, sacred books” に従う。ただし OJED (s.v.) でも他の用例について問題提起しているように、*sāstra* と *āgama* が同類語の並列なのか、この語順に意味があって何らかの修飾関係でもあるのか、解釈の余地が残る。
- 71 *tan hana kolih*: 複数の異読にある *tan hana koli* に従えば、*tan kolinya*, *tan hana moli* などに連

- なる慣用句 (“there is nobody uncertain about it, as everybody knows”) と読み取れる。OJED の uli の項参照。
- 72 samyagjñāna: OJED でも示しているように、サンスクリット語でいえば bahuvrīhi、所有を表す複合語となっている (“having right knowledge”)。Wṛhaspatitattwa 26 に同種の用法があり、そこでは、pratyakṣa, anumāna, āgama という3つの pramāṇa をそなえた人が samyagjñāna であるとする。安藤2006, p.199参照。
- 73 ikaṅ sinaṅgah prajñān: prajñān は prajñā ないしは kaprajñān と読むべきか。
- 74 prakāśa: Wṛhaspatitattwa 52 で、知識に光輝が与えられるとし、その光輝について、滅しない、眩惑がない、覆い隠されない、等の定義づけをしている。安藤 2007, pp.191-192参照。
- 75 kṣāṭaiśwaryan: 八自在力については、Wṛhaspatitattwa 66 で aṇimā, laghimā, mahimā, prāpti, prākāmya, īsitwa, waśitwa, yatrakāmāwasāyitwa を挙げ、同67-74でそれぞれの自在力を詳説する。他のテキストでの用例も含めて、安藤 2007, pp.197-199; 205 (注55-56) 参照。
- 76 kayogīśwaran: Wṛhaspatitattwa に同義でいくつかの用例がある (52, 59, 74)。安藤2007, pp.193-195; 199参照。
- 77 ndātan wēnaṅ rinakwan: rinakwan という形は OJED に登録されていない。仮に rinakwa > rakwa (“to rely on someone else’s words”) と読んでおく。

参照文献

- Gonda, J.
1973 *Sanskrit in Indonesia*, New Delhi (2nd ed.).
- Hooykaas, C.
1931 *Tantri Kāmandaka, een oudjavaansche Pañtjatantra-bewerking in tekst en vertaling uitgegeven*, Bandoeng.
- Kern, H.
1900 *Rāmāyaṇa kakawin*, 's-Gravenhage.
- Sharada Rani
1957 *Ślokāntara, an Old Javanese Didactic Text*, New Delhi.
- Soebadio, Haryati
1971 *Jñānasiddhānta*, The Hague.
- Stevens, A.M.
2004 *A Comprehensive Indonesian-English Dictionary*, Ohio University Press.
- Sudharshana Devi Singhal
1957 *Wṛhaspatitattwa*, New Delhi
1962 *Tattwajñāna and Mahājñāna*, New Delhi
- Zoetmulder, P. J.
1982 *Old Javanese-English Dictionary*, 2 vols., 's-Gravenhage. (訳注で OJED と略称)
- 安藤 充
2005 「ウリハスパティの真理(1)」『人間文化』第20号, pp.319-333.
2006 「ウリハスパティの真理(2)」『人間文化』第21号, pp.199-219.
2007 「ウリハスパティの真理(3)」『人間文化』第22号, pp.191-209.
2009 「古ジャワ語シヴァ教文献『原理の知識』和訳(1)」『人間文化』第24号, pp.161-176.